

第3学年の先生方へ

この冊子は「新しい社会 3・4年生 上」3
「かわってきた人々の暮らし」の学習に役立てて
いただきたいと思いますと思って作成したものです。

先生方の指導時の参考資料として、または子供
たちの調べ学習時の辞典として、教科書副読本と
して、学習ドリル帳として、学習ノートとして、
見学時のしおりとして、自由研究の参考書や見学
時の学習用シートなどとしてご活用ください。

この冊子は印刷して子どもたちに配布すること
ができます。

1項目が見開き2ページで構成されております
ので、印刷の際はページがずれないようにご注意く
ださい。

指導なされる先生方へ

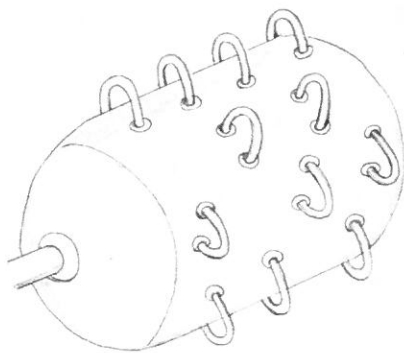
この「れきしみんぞく子ども辞典」は、第3学年社会科「かわってきた人々の暮らし」の単元を通して、現代、未来を生き抜く子供たちに自分たちの生活をより豊かに楽しくするための生きる力を身に付ける機会としていただきたいと思います。

なぜ、「古い道具」や「昔の暮らし」、「のこしたいもの、つたえたいもの」を学習することが、上記のような「生きる力」を身に付けることにつながるのでしょうか。

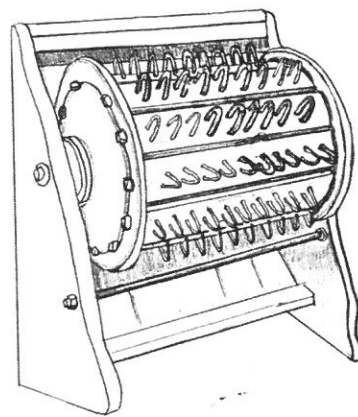
2、3例をあげて見たいと思います。

私たちの周りには私たちの生活を便利により豊かにするための製品が満ちあふれています。農家の人たちの仕事について考えてみましょう。私たちが食べている米は真っ白いですよね。でも、ここまでにするためには、以前は様々な準備と作業が必要でした。当館ではそのとき使用された道具が展示してあります。実った稲を脱穀し → 悪い粃やゴミを取り除き → もみ殻を取り除き → 米ぬかや胚芽を取り除き白米にするまでには、様々な道具が使用されました。しかし、今では稲刈りから脱穀まで「コンバイン」という一台の機械だけでできるようになりました。

今どき、足踏み脱穀機で苦勞して脱穀している農家は殆どないはずですが。「便利になってよかったね!」「もう古い道具はいらないんだね!」で終わりそうな話ですが、私はある事を知ってびっくりしてしまいました。なんと、コンバインを覆っている蓋の中には図1のようなものが入っていたのです。丸いドラムが回転するようになっており、ドラムにはUの字型に曲げられた鉄製のものが付いていたのです。まさか、近代的な機械の中に、昔使用されていた図2の足踏み脱穀機と同じような原理が利用されていたとは思ってもいませんでした。つまり、昔の道具の中には、私たちの生活に今も役だっているものがあるのです。



【図1】



【図2】

このようなことから、昔の道具を学ぶ意義があるのではないのでしょうか。今、話題の「ハイブリットカー」が突然作られたわけではないことはどなたも御存じでしょう。ダイムラーが発明した様な車が基になり、それに改良を加えられ、それが繰り返されて

現在の最新の車が生まれているのです。現在の生活をより豊かにしているものが、綿々と続いている先人からの知恵や努力が基になっているとしたら、私たちがそれから学んだり、もう一度原点を振り返ってみることはとても意義のあることだと思えるのですがどうでしょうか。

さて、資料館にある資料は当時の人たちが日常生活の中に取り入れ、普段に使用していたものがほとんどです。でも、それらの資料は、私たちに、単に、このように使われたというような「その用具のもつ役割」だけを伝えてくれるだけのものではありません。時には、それらを使用した当時の人たちの生き生きとした生活の様子や温もり、思い、考え、知恵、技術などまでも伝えてくれることがあります。更に、私たちの現代の生活や将来において、私たちがよりよい生活を営む上で役立つ貴重な示唆を与えてくれることさえもあります。こんなところにも学ぶ意義があるのではないのでしょうか。でも、そんなことを教えても3年生の子どもたちには中々理解できないと思います。せめて、先生方だけでもこんな意義もあるのだということを知っておいてほしいのです。それを、知っていて指導するのと知らないで指導するのでは、子供への伝わり方が違うのではないかと考えております。

それぞれの項目にはこんな願いが込められています。

【1 循環型だった昔の人たちの生活】

「循環型」という言葉がキーワードです。現代の私たちが忘れている大切なことがあります。それは、ものには全て役割と機能等が備わっていることです。そして、資源は有限だということです。昔の人は物をととても大切にしました。それはなぜかという、もののもつ役割、機能、値打ちなどを最後まで使い切ろうとしたからです。そして、さまざまな工夫や改良を加えることによって、自分たちの生活をより豊かなものにする知恵ももっていました。ですから、一度使ったものをもう一度使ったり、別の用途に再生する（再利用）は当たり前だったのです。そして、使い終わると自然に還し、また、再生に役立てたのです。

現在の私たちの消費経済は好景気を生み出す反面、資源の枯渇を生じさせます。そして、エネルギー資源の消費が環境破壊の一因ともなっています。そんな現代社会において、「自然の恵みを上手に使用し、それを再生し、自然と上手に共存することを可能としていた先人がいた」ということと「どんな生活をすることによってそれが可能となったのか」ということを知ることは、これからの私たちの生活を本当に豊かな社会にしていくうえで何か大きなヒントを提示してはいないのでしょうか。

「自分たちの身の回りにあるもので無駄にしていることはないだろうか」とか「無駄な電気は消そうとか」「ごみをなるべくへらそう」でもいいと思います。子供たちに環境に優しい循環型社会について考えるきっかけにしてみてもどうでしょうか。

【2 洗濯はとてまたいへんなしごとだった】

「とてまたいへん」という言葉がキーワードです。洗濯をスイッチ一つで機械が乾燥までやってくれる。本当に便利な世の中になったものです。でも、このような便利になった背景には当時の主婦の切実な思いがあったのです。

主婦も生活を維持するための大切な労働力だった時代、大家族の衣服やおしめなどを何十枚となく一枚一枚石鹼をこすりつけては洗濯板であらい、すすぎ、干す作業を伴う洗濯は大変な重労働でした。湯沸かし器などなかったので、真冬には、凍り付くような冷たい水で洗濯するため、手の指は割れ、ひびわれ、あかぎれの痛みに耐えながらの作業でした。「この辛い重労働から解放されたい。」洗濯機の急激な普及率の増加の背景にはそんな主婦の思いがあったのかも知れません。さて、教科書には、「せんたく板の体験」が載っていますが、この体験を通して子供たちに2つのことに気付かせたいものです。

ひとつは、一枚洗っただけでも大変なのに、それが何十枚もだったらどんなに大変な作業だったかということです。「自分たちの日常では今では想像もつかない昔の人の苦労を思い起こして見る」そんな機会が子供たちにあってもいいのではないのでしょうか。

もう一つは、一見単純に見えるせんたく板にも、作業を効率的、合理的に行うためのさまざまな工夫がなされていることです。「子ども辞典」にはそのことが書いてありますので、子供たちにぜひ気付かせていただきたいと思います。

（子どもに聞かせてあげたいお話）

洗濯板は日本古来のものではないということをお話してあげてください。子供たちに「昔話に出てくる桃太郎のおばあさんは、川に洗濯に行くとき洗濯板を使ったと思う？」と聞くと、ほとんどの子が「使った！」と答えます。でも、答えは「使わなかった」、正しくは「使えなかった」のです。洗濯板には石鹼を置くくぼみが付いていますね。つまり、洗濯板は石鹼をつけてこすりつけ泡立たせる役目の道具です。ですから、石鹼のなかった昔の日本では使用されなかったのです。明治時代に外国から入ってきた道具なのです。

【3 昔は炭火をつかって衣類のしわをのばしていた】

「炭火」という言葉がキーワードです。洗濯したあと、衣類についたしわをのばさなければなりません。私たちが当たり前のように使用している電気アイロンはどんな原理を利用してしわをのばしているのでしょうか。

それは、アイロンの底を熱くし、熱を利用してしわをのばすというやり方です。では、私たちはなぜこの方法を思いついたのでしょうか。そこには、炭火を使って、炭火の熱でしわをのばすという考えを思いついた先人の発想があったからではないのでしょうか。なめらかに動かせるように先のとがった形のアイロンを私たちは現在使っていますが、現代のアイロンの形も炭火アイロンの形も似ているとは思いませんか。将に、先人の知恵が現代の私たちのく

らしに生かされているということを知るよい教材のように思えます。

「炭火アイロン大図解」をみると、ただ炭火を入れるだけではなかったことが分かります。炭火を入れただけでは、温度がコントロールできないので、空気穴をあけたり、煙突をつけるなど様々な工夫がされています。

炭火アイロンはより機能的に使いたいという先人の知恵がいっぱいあった道具でもあるのです。「炭火アイロンの大図解」を見せれば、「本当にこんなに細部にまで亘って様々な工夫が凝らされている」ということを子供たちに実感させることができるのではないのでしょうか。

【4 田うえまでには、しなければならぬたくさんのしごとがあった】

「たくさんのしごと」という言葉がキーワードです。5年生になると、田植や稲刈り体験をする学校もあると思います。しかし、子供たちはひょっとすると、田植が米作りの最初のしごとだと思っただけではないでしょうか。田植に至るまでには、様々な準備とそれに使うたくさんの道具が必要でした。カラカラに乾いて堅くなった田はそのままでは作物を育てることができません。稲株を掘り起こし、土を砕き、柔らかくする必要があります。田おこしには三本鍬も使われましたが、かなりの重労働でした。

作物をよりよく育てるためには、より深く掘り起こした方がよかったですので、人間の力だけで土を深く掘り起こすことは本当に大変な作業だったと思われそうです。そのあと、肥料をまき、田に水を張り、マンガを使って代かきをしますが、まんべんなく土を平らにするためには、馬をじょうずに歩かせなければなりません。鼻取りとって、それは子供たちの仕事でした。馬が必ずしもまっすぐに歩いてくれなかったり、ぬかるんだ土に足を取られたりするため、それは大変な仕事でした。代かき後も肥料をいれますが、肥料には人糞尿などを発酵させた堆肥が使用されました。人糞尿が肥料だったことを子供たちに話してあげてください。人糞尿が肥料だったなんて現代の子供たちに想像できるのでしょうか。

【5 白いお米にするまでにはいくつもの道具がひつようだった】

「いくつもの道具」がキーワードです。子どもたちは精米され白くなった米を食べています。でも、そのようになるまでにはたくさんの仕事と道具が必要でした。ここに書かれてあるのはその一部にしか過ぎません。

電気やガソリンを使って動かす動力のなかった時代、すべては手仕事でした。

「足踏み脱穀機」は自分の足で板を上下に踏みこんでドラムをまわし脱穀しなければなりませんでした。

「とうみ」は一人が脱穀が終わった籾を上から入れ、もう一人がハンドルを回し風をおこして、ゴミを吹き飛ばしたり、よい籾と悪い籾をよりわけなければなりませんでした。二人の呼吸が合わないと中々うまくより分けることができませんでした。器用さも要求されたのです。

「どずるす」は籾殻を取るために、上部の円筒形の部分を数人で回さなければなりません。ここまで行い、やっと玄米にすることができたのです。

更に「うすときね」を使って突くと、みんなが食べているような白いお米になるのです。米作りにはたくさんの道具が必要だったこと。また、その道具にはV字またはU字型に曲げられた鉄が利用されていたり、風の力や重力をうまく利用したり、摩擦を利用して籾殻を取り除いたり、米と米を摺り合せて米ぬかなどを取り除いたりするなど、自然の力をうまく利用、工夫したりした先人の知恵と努力が見られるのです。人工で作られたエネルギーしか知らない子供たちに自然にもじょうずに使えば利用できるエネルギーがあり、先人はそれを有効に活用していたことを教えてあげてほしいと思っております。

【6 脱穀用具のうつりかわりと使い方】

一見すると簡単そうに見えますが、実ったもみを稲藁から取り外すのは簡単なことではありません。数えきれない程の籾が一個一個しっかりと稲に付いているのですから、取り外すためにはそのための用具が必要です。

「こきはし」はしごいて籾を取り外すための道具ですが、作業にはたくさんの時間がかかったことでしょう。「なんとかして能率的に脱穀を行いたい」その切実な人々の願いが新しい脱穀用の道具を生み出していったものと思われます。

「千歯こき」から「足踏み脱穀機」になって、さらに作業の能率アップにつながりました。しごいて取ることから、はじきとばす方法になったわけですが、実は、このはじきとばすという「足踏み脱穀機」の発想にはある偶然の出来事がヒントになったとも言われています。どんな偶然だったのでしょうか。興味のある人はインターネットで調べてみてください。エピソードとして子供に話してあげてもおもしろいですね。新しい道具の出現の陰にはこのようなこともあるのですね。

【7 はがまで炊いたごはんはとともおいしかった】

「とともおいしかった」という言葉がキーワードです。電気店には「電子炊飯器」がたくさん並んでいます。本当に便利になったものですね。でも、製品のネーミングでなんか気付かれた事はありませんか。やたらに「～釜炊き」と「釜」が付くネーミングが多くありませんか。

確かに、はがまでのご飯炊きは大変な仕事でした。特に「火かげん」は大切に、「始めちよろちよろ、中ぱっぱ…」などという言葉があったくらいでした。最初から出来上がりまでずっと傍についていなければならず、炊きあがるまでは別の仕事ができませんでした。

でも、食べた経験のある人は分かると思いますが、はがまで炊いたごはんはとともおいしかったのです。電子炊飯器が少しでもはがま炊きのおいしさに近づこうと思って、ネーミングに「釜」を使っているのも分かる気がしますね。

【はがまとかまど大図解】

おいしく炊くため「ふた」を重くしたり、底を丸くしたり、様々な工夫がされていることに気づかせてください。また、かまどにのせたとき、かまどから落ちないためにまわりに「つば」をつけるなど様々な知恵が見られます。なお、ここに書かれてある道具は単独で存在するのではなく、「ご飯を炊く」という一連の作業に必要なひとまとまりの道具であるという見方もできます。道具を調べるとき、あることをするため一連の道具（セット）というように関連させて取り扱う方法も大切な学習法と思われれます。

【8 昔は一人一人が自分専用のおぜんをもっていた】

テレビの時代劇を見ても、お殿様がテーブルで食べていたなどという場面はほぼありませんよね。日本では昭和の初めころまではずっと、一人一人が自分専用のお膳で食事するのが普通だったのです。

座る場所も決まっていて、きちんと座って、黙って食べなければなりません。食事の時間は躰や礼儀作法を身に付ける場所でもあったのです。ちゃぶ台の出現はそんな家族の姿を大きく変えます。昔のホームドラマではちゃぶ台を囲んで食事する場面がよく使われましたが、家族がちゃぶ台を囲んで食事する姿は家族のだんらんやくつろぎを象徴する風景になりました。おかずも個人盛りから家族盛りになり、みんなでつつつきあいながら食べる様子は何か現代の日本人が忘れかけているアットホーム的なものを感じさせてくれますね。

【箱膳の使い方】

なぜ昔は箱膳で食事をしたのでしょうか。そこには合理的な理由と先人の知恵があったのです。

最初に、箱膳とはどんなもので、どんな使い方をしたのか説明いたします。

自分専用のお膳のことを言います。ふたを裏返すとお膳に早変わりします。御膳にしたときに滑らない工夫がしてあります。（ふたの表に浅い掘りこみがしてあり、はまるようになっている）箱膳の中には、飯椀（ご飯茶わん）、汁碗、皿、湯のみ茶碗、箸などが収納されていました。食事が終わるとたくあん（おこうこ）で茶碗、または塗物のお椀の中を拭き取って食べ、その後、茶碗にお茶を注ぎ、お茶を飲みます。それから、ふきんで茶碗や箸を拭きます。茶碗などを裏返し、蓋を閉め、棚にしまいます。次の食事のときもそのまま箱膳を出して使用しました。

これだけ聞くと、なんて不衛生なんだろうと思いがちですが、実は、箱の中に入れて置くことによって、ほこりや虫を防ぐことができました。油もののおかずが少なかったので、拭くだけでなんともありませんでした。個人用だったので、匂いが付いたりしないように各自

が注意し大切にしましたのです。(月に何度かはきちんと洗いました)

では、どんな知恵があったのでしょうか。当時は水道がありませんでしたので、水はとても貴重だったのです。水汲みが大変だった時代、洗うための水が節約できた箱膳はとても便利だったのです。また、大家族だった昔、いちいち食器を並べたり、片づけたりしなくてもよかったのが時間の節約にもなり、家事の手間が省けました。収納も場所を取らず、食事は残さず食べたので無駄がありませんでした。そのような意味では箱膳はとても合理的な便利な道具だったのです。

そして、イラストの食事をしている子どもが言っているように、箱膳で食事しているときは食事作法などを身に付ける躰の場でもあったのです。家族の一員としての自覚を促された場でもあったのです。そんな箱膳の果たした役割のいくつかを子どもに話してあげてはどうでしょうか。

【9 昔の冷蔵庫はこおりでひやしていた】

ある子供から、「昔は電気冷蔵庫がなかったから氷冷蔵庫を使っていたのでしょうか？」
「電気がないのにどうして昔の人は氷冷蔵庫で使う氷をつくることができたのですか？」と質問されたことがあります。電気がなかった訳ではないのですが、何とするどい質問でしょう。こんな見方のできる子供たちに育てたいものですね。

実は、冬の間池などで凍った凍りを氷室などに入れておいて夏使ったりもしたのですが、当時、工場で夏に氷を作っていたのです。それは、化学を応用した方法で作りました。

先生方も注射する前にアルコールで消毒するとひやっとしたという経験をお持ちのかたがいるはず。なぜひやっとしたのでしょうか。それは熱が奪われたからですね。これを「気化熱」といいます。ものは液体から気体になるときまわりの熱を奪い、気体から液体に戻るときまわりの熱を吸収し熱くなります。実は、この原理を利用して氷を作っていたのですが、この原理はまったく今の冷蔵庫の原理と同じです。

子供には難しいので説明はやめますが、前述のような素朴な疑問から実は大きな発見につながる場合があります。氷冷蔵庫を見て、「ああ 小さい！」と言った子供もいます。「なぜ小さくてもよかったのか」を考えると、当時の人たちの食生活の仕方が見えてきます。昔の生活の様子や道具から、たくさんの疑問を見つけ出すことができるような子供たちに育ててあげたいものですね。

【電気冷蔵庫の仕組み】

最初の頃の冷蔵庫は「フレオン (フロン)」というものを使いました。これが液体から気体になるとき、熱を奪い回りの空気を冷たくするのです。この考え方は氷で周りの空気を冷やすという昔の人の発想と通じるものがあります。

電気冷蔵庫は、蒸発した「フレオン (フロン)」をまた液体にもどし、また気体にして何度も使っています。

【10 昔の人は電気の明るさにびっくりした】

「びっくりした」がキーワードです。本当にびっくりしたのです。皆さんも初めてデズニールランドの夜のパレードの明かりを見た人はびっくりしませんでしたか。初めて電気を見た人の驚きも同じくらいの驚きだったかもしれません。その様子が書いてある本があります。新美南吉という人が書いた「おじいさんのランプ」という本です。その本の中で、主人公の巳之助が知り合いの甘酒屋に入って、初めて電気がつく所を見たときの様子がこのようにえがかれています。「まもなく、晩になって、誰もマッチ一本すらすらなかったのに、突然、甘酒屋の店が真昼のように明るくなったので、巳之助はびっくりした。あまり明るいので巳之助は思わずうしろを振り向いて見たほどだった。」「光は家の中にあまって、道の上にもまごぼれ出ていた。ランプに見慣れていた巳之助にはまぶしすぎるほどのあかりだった。」

その明るさは今で言うとも燭 10 数本程度の明るさにしか過ぎなかったのです。それでもすごい驚きだったことが、この本から分かります。

今ではたいしたことと思えないことも、それを初めて見たり手にしたときは、いつの時代でもすごいこととして受け入れられていたのです。「昔は暗かった」で終わらせるのではなく、暗くなり電気のスイッチを入れる時の人々のわくわくした気持ち、一家で一個しかなかったかもしれない電気の光の下で一家団らんで夕飯を食べる家族の喜びなども子供たちにできたら伝えたいものですね。

【11 こたつは一家だんらんの場所だった】

「一家団らん」がキーワードです。各部屋にテレビがあつたり、自分専用の部屋があつたりする現代。親が早朝出勤、帰宅が遅かったりすると家族が一堂に会するという機会も少なくなっているのではないのでしょうか。物質的には豊かになっても、なぜか心の豊かさがそれに伴わず実感できない。そんなことはないのでしょうか。

今のように部屋全体を温める暖房方法でなかった昔、こたつは寒さから体を温めてくれる場所でした。いつの間にか体を温めるため家族がこたつに集まってきました。家族全員がこたつ布団にかじりつき、みんなでみかんを食べたり、お茶をのんだりしながら談笑する姿はまさに、一家団らんそのものだったのです。確かに生活は今より貧しかったかもしれませんが、こたつに入って家族が顔を突き合わせている姿に、家族のぬくもりが伝わってくるような気がしませんか。

今、ともすると忘れ去られがちな人間として大切な「家族のふれあい、絆」、そんなものをこたつで談笑している家族の姿から子供たちに感じさせたいものですね。

【12 昔の電話は交換手呼び、相手先につないでもらった】

現代の情報機器はどこまで進歩するのでしょうか。もう電話というイメージではなくなっていますね。さて、電話が一般家庭に普及するまでは情報伝達手段は電報が主役でした。

電話が使われ始めたとき、電話のある家は近所でも数軒しかありませんでした。電話をかけたいときには電話のある家の人に電話を使わせていただきました。電話は直接相手の電話にかけることができませんでした。ハンドルをグルグル回すと、電話局の交換手の人が出てくれます。交換手の方に相手の住んでいる地域、電話番号を告げると、一旦、「受話器を置いてお待ちください」と言われます。すぐにはつながらず、数十分待たされることは普通でした。しばらくすると、ベルがなり、受話器を取ると、交換手の方から「相手の方におつなぎしました」と言われ、やっと、相手とお話することができました。終わると、もう一度交換手の方をお呼びし、電話料金がいくらかを尋ねます。教えてもらった料金を電話を貸してくれた方に支払って終わりになります。電話を貸してくれる方に大変迷惑をかけるので、本当に必要な時以外は電話はしませんでした。でも、緊急の時、電報よりもすばやく連絡ができる電話は本当に便利なものだったのです。

小学生でもスマートホンを持つ時代になりましたが、もう一度、電話の役割とは何だったのか考えさせてみるのもいいのではないのでしょうか。

【13 テレビは家族のすがたを大きくかえた】

「大きくかえた」がキーワードです。テレビは二度大きく変えました。一般の家庭ではテレビが高価で購入できなかったとき、どうしてもテレビを見たかった人たちは、テレビのある店に群がったり、テレビのある家にお問い合わせしてもらったりしました。そんなにしてまで見たかったテレビがやがて一般の家庭でも購入出来る程の価格になると（それでもかなり高価なものだった）たちまちテレビの前は一家団らんの場になりました。当時のテレビはリモコンがありませんでしたので、スイッチや音量、色調の調節などすべてテレビに付いているチャンネルやつまみなどで行わなければなりません。また、放送局の数もそれほど多くなかったので、チャンネル争いもあまりありませんでした。また、1日中放送されていなかったでテレビの放送される時間も決まっていました。夕飯時になると家族がテレビの前に集まりみんなで同じ番組を見て語り合う、会話のある姿はまさに家族の温もりが感じられる「団らん」そのものでした。

しかし、家庭にテレビが何台もあるのが普通の時代になると、テレビの前からしだいに家族の姿が見られなくなり、テレビは自分専用のものとなっていきました。更に、テレビゲームやファミコンが大ヒットすると、テレビはゲーム機の役割をも果たすようになりました。録画機能も付いてくると、その時間にいなくてもいつでも番組が見れるようになりました。家族が集まる必要がなくなってしまったのです。「団らんの姿が見られなくなった」これが二度目の大きな変化となりました。

情報機器はどんどん進化していきますが、便利、使いやすさ、娯楽性などの面だけでない情報機器の役割についても考える機会にしてはどうでしょうか。